

ポジション

「みんな、どこのポジションをやりたい？」

そこだけ日陰となった大きな木の下でまるく並べたベンチに座る子どもたちに向かって私は聞いた。「フォワード！」という元気な声が返ってくる。

かつては「トップ下」が一番人気だったそうだが、現代サッカーにおいて10番が特別な存在でなくなるとともに、人気のポジションも変わっていった。今はフォワードの次に人気があるのがボランチだ。

手を高く上げている子どもの中から足の速いふたりをフォワードに指名すると、小さなため息がいくつも聞こえてきた。

一昨年の暮、娘が所属する少女サッカーチーム「FCスマイルズ」の練習に暇に飽かして顔を出していたところ、監督から「ちょっと手伝ってもらえませんか」と声をかけられたのが始まりだった。

サッカーは見るのもやるのも大好きだった。けれど教えるなんてことは考えたこともなかった。首を振って断ると、監督は笑いながら「大丈夫ですよ。ぜひお願いします」と手を握ってきたのだ。その手は思いのほか力強く、私がうなずくまで離されることはなかった。私のような立場を「お父さんコーチ」と呼ぶのをずいぶん後になって知った。

低学年の子に作戦ボードを見せながら「攻めるのと守るのどっちがいい？」と聞いてみる。

「えー、どっちかなの？」と答えが返ってきた。どっちかではないのだが、こんなことで手間取っていは試合開始の笛が鳴ってしまう。この日は、U-12（小学校五、六年生）の試合のあいだに、私が担当するU-10（小学校四年生以下）の練習試合が組まれていた。

それぞれのポジションの役割を思い切り噛み砕いて説明すると、フォワードとボランチ、そしてセンターバックはどうにか決まった。すると視線は作戦ボードのなかでひとつだけ違う色をしたマグネットが置かれたポジションに集中していく。ポジションの決まっていない子どもたちがバタバタと手を上げ、サイドバックやハーフを指さした。

最後まで決まらないのは、いつもゴールキーパーだ。

「カッコいいユニフォームが着られるぞ」

緑地に黄色の稲妻模様がデザインされたゴールキーパーのユニフォームをヒラヒラさせてみたけれど、顔は下を向いたままだった。

コーチである私が指名しないといつまでたっても決まらないだろう。五人いるU-10では最上級生の四年生のうち、ふたりを指名した。ひとりは私の娘であり、もうひとりは一番背の高いアリサちゃんだった。ふたりとも「えー」と不満そうな声をあげたが、「もう一試合は好きなポジションで出場させてあげる」と約束すると、アリサちゃんがゴールキーパー用のユニフォームに袖を通した。

大会本部からチーム名を呼ばれ、子どもたちはあわててベンチから腰を上げた。手にした水筒が重たいのか、小さな背中がふらふらと揺れている。審判がセンターラインに並ばせ、挨拶をすると、不思議なことにそれぞれがバランスよくグラウンドに散っていく。なかには私が伝えたポジションではない子もいるけれど、おそらくそこが本能的にやりたい場所なのだろう。

笛が鳴り、ボールが動き出す。子どもたちは声をあげて、ボールに集まる。海のなかで小魚が群れをなして泳ぐようにボールを中心に動いていく。その群れからひとり逃げ遅れたかのようにしてアリサちゃんはゴールの前に立っていた。キーパーグロ-

ブをはめた手をじっと見つめている。

試合はお互いシュートチャンスすらなく、○対○の引き分けに終わった。ベンチに戻ってきたアリサちゃんは、「一度もボールに触らなかった」と言っていて、キーパーグローブを私の娘に渡した。

次の試合に向けて話をしていると、審判からベンチを空けるよう声をかけられた。私たちの後ろにはU-12のチームが試合の準備をして控えていた。

「あれ？ もう一試合あるんだよね」

子どもたちが首を傾げ、疑問の声をあげる。事前にメールで届いていた大会要項では、U-10の試合が二試合組まれていたはずだった。私は白いテントの下にある本部へ駆けていき、確認する。

「まだ一試合しかやってないんですけど……」

「あっ、すみません。予選でPK戦があったりして時間が押していたので、一試合カットさせていただきました」

いつの間にか子どもたちも大会本部の前に集まっており、私と本部のやりとりを聞いていた。

「えー、もうやらないの？」

「ごめんごめん、ちょっと時間がなくて」

眼鏡をかけた本部の人が頭をさげている。

「いつも下の学年の試合がカットされるんだよね」

子どもたちは口々に文句を言い、肩を怒らせながら、荷物の置いてある大きな木の下へ歩いていった。

「じゃあ、お弁当にしよう」

声をかけると先ほどまでの不満も忘れ、バッグからお弁当箱を取り出した。地面に敷かれたレジャーシートの上に車座となり、大騒ぎしながら食べ始める。

しかしその輪にひとりだけ加わらず、シートの隅っこに座ったままの子がいた。それはアリサちゃんだった。

「どうした？ お弁当忘れたのか？」

「ねえ、もう着替えていい？」

アリサちゃんはゴールキーパーのユニフォームを指さした。

もう、試合はないのだからユニフォームを着ている必要はなかった。「いいよ」と返事をしたとき、私はあることに気づいた。

二試合の予定だったから、一試合はゴールキーパーを任せ、もう一試合は好きなポジションをやらせてあげると約束をしたのだ。しかし二試合目がなくなってしまったという事は、アリサちゃんは今日、ゴールキーパーだけで終わってしまったという

ことだった。

アリスちゃんはみんなと同じフィールドプレイヤーのユニフォームに着替えて、お弁当の輪に加わる。

私は持ってきたおにぎりを口にすることができなかった。保護者の方が用意してくれたコーンスープは手のなかで冷めていった。

太陽が西に傾き始めた頃、U-12の決勝戦が行われた。そこには私たちスマイルズのU-12チームが進出しており、U-10チームはグラウンドが見下ろせる土手の上から応援することになった。スマイルズはずいぶんと押し込まれていたけれど、カウンターで何度かチャンスを作った。ただお互い決定機に決められず、○対○で前半終了を告げる笛が鳴った。

「ピッ、ピィー！」

その音が途切れると、アリスちゃんが私の隣に座った。ゴールキーパーのことで不満を言われるのかと一瞬身構えてしまったが、目の前で行われていた試合のことを話し始めた。

「強いね」

「うん。でもスマイルズも頑張ってるよ」

「わたしも六年生になったら、試合に出られるかな？」

出られるよと返事をしたかったけれど、その言葉を飲み込んだ。それはそのときのチーム事情によるし、私に決定権があるわけではなかったからだ。

「練習をいっぱいすれば出られるんじゃない」

そう告げると「そうだよね」とアリサちゃんは笑った。

その笑顔を見て、率直に謝ることにした。

「今日、ごめんね。二試合あるって聞いていたから」

「なにが？」

「ゴールキーパーだよ。だってもう一試合好きなポジションで試合に出させてあげられて約束したじゃん」

アリサちゃんは顔を上げ、私の目をじっと見つめた。

すぐ近くではしゃいでいる子どもたちの声がすつと静かになったような気がした。風向きが変わったのか、頬にあたる風が急に冷たくなった。

アリサちゃんが口を開く。

「いいよ、いいよ」

そう言って、立ち上がる。

「ねえ、あっちで練習しようよ」

腰を下ろしていた私の手を強く引っ張った。

ボールを抱えて走っていくアリサちゃんの背中に、後半の始まりを告げる笛が鳴った。